

日本におけるイスラム教認識は、歴史的に見て日本人の大多数が仏教、ないしは神道に帰依していた関係上、これら仏教や神道などに比べて浅く、現代まで日本人にとってのイスラム教に対する認識の低さにつながっている。日本人にとってイスラム教が意識させるようになったのは、2001年のアメリカにおける同時多発テロ以降と言っても良いくらいのもので、それ以前であれば、1973年の石油危機、またその後のイランにおけるイスラム革命によってアラブ地域への関心が高まった時であった。

しかしながら、日本とイスラム圏との交流は、意外に古くからあるとされ、奈良、平安時代には始まっていたとする本も有る。（東隆真『日本の仏教とイスラーム』春秋社）

また、最大のイスラム教国であるインドネシアなどは経済的關係上において重要地域であり、今後ますますその交流は盛んとなることを考えると、イスラム教に対する日本人の

知識、認識を深めることは重要となつてゆくことは間違いない。

だが、私たちは、日常生活においてイスラムに接する機会も少なく、自然、モスクが建っているにもかかわらず、見落とししてしまっている場合が多いのは事実である。それは、調べてみると日本主要な都市には大小の差はあれ、モスクが建っているが、実際その地域に住んでいても、意外にその存在を知らないことが多くある事からも分かる。

では何故一般の日本人はこれほどまでにイスラム教に対して無関心であり興味が薄いのであろうか。日本ではイスラム教がこれほどどのように扱われてきたのか見てゆきたいと考える。

日本人の多くにとって、見落とししがちな日本のイスラム教ではあるが、その活動は全国規模であり、盛んである。

宗教法人としても、日本イスラム教団をはじめ、日本ムスリム協会、イスラミック・セ

ンター・ジャパンなどがあり、それぞれが宗教活動を行っており、学術団体としても日本イスラム協会などがある。

さらに、日本にはイスラム教国圏から多くの人々が訪れ、あるいは在住しており、その数は10万人とも30万人とも言われている。

また、コーランの日本語訳なども数多く出されており、現在では、インターネットを利用して閲覧することも可能である。

次に、これまでの日本人とイスラム教との関わりというものはどのようなものであったのであろうか。日本人とイスラム教との接触についてみてゆきたいと考える。

日本人として初めてイスラム教徒となった人物にはアブドル・ハリル新月こと山田虎次郎（1866－1957）やアフマッド・阿馬土こと有賀文八郎（1868－1946）らが挙げられ、また、初めてメッカ巡礼を行った日本人イスラム教徒として、山岡光太郎という人物が挙げられ、その様子は彼の著書

『世界乃神秘境アラビア縦断記』（東京東亜堂書房、明治45年）に詳しく述べられている。

彼は、明治42年から43年にかけてメッカへと巡礼し日本人初の「ハッジ」となったわけであるが、この人物は元々イスラム教徒として巡礼をしようとしていたわけではなく、「邦人未踏の亜刺比亜神府指して」アラビア半島、そしてメッカへと行こうとしていたが、その途上のボンベイにおいて急遽イスラム教徒となった。すなわち言い方はよくないが、「にわかイスラム教徒」であったのである。その証拠に、「イスラムについての知識は怪しげなもので、礼拝殿を出たのち、ムラードに向って『何がため四方拝せるや』『神格は何処に』『これを標象せる神体は那邊にありや』など、愚問を連発したり、カムラン検疫所では、大便を紙片で拭ったところを見とがめられ、教徒の間に物議をかもしたりする失敗もあった」(<http://islamcenter.or.jp/jpn/assalam/Ass>)

a l a m N o . 4 . 1 . h t m より引用) そうである。

山田虎次郎や有賀文八郎は純粹にイスラム教に対して共感したからこそ改宗したわけであるが、山岡光太郎の場合イスラム教に必ずしも関心があったわけでは無かったことが分かる。

学術研究という立場から、現在では各大学において広まってきたイスラム教についての研究・講義であるが、その始まりはどの辺りにあるのであろうか。日本におけるイスラム研究についてみてゆきたいと思う。

日本におけるイスラム教研究というものの歴史としてはあまり古くない。

主にこの研究が始まったのは明治時代に入ってからであり、特に研究が盛んになったのは1930年代、日中戦争の勃発とともに中国西北部侵攻とともに中国ムスリムに対する軍事政策上重要度が増したことや、大東亜共栄圏の名の元に南進を推し進めてゆく上で、

東南アジアのムスリムに対する政策的関心の高まりによって、いわば時局便乗的な形でイスラム研究が形成、組織化されていった。

しかしこの時局便乗的な研究は、軍部、外務省、大東亜省などの官僚主義的利害関係からの競合の間で十分な組織化が行えず、さらに敗戦によってイスラム研究者が定着する間もなく、そのまま消滅してゆくこととなった。

また、この頃に研究機関としてイスラムに関する膨大な書籍の収集を行ってきた「東亜経済調査局」は戦後に廃止され、それに伴って、その膨大な蔵書のほとんどがアメリカに流れるか、行方不明になったことによって失われたことも、戦後の研究の立ち遅れに影響を与えていたといえる。

このような中で、『日本人にとってイスラームとは何か』（筑摩書房、1998年）という著書の中で鈴木規夫は、大川周明のイスラム研究に対する戦前、戦後を通じて果たした役割の大きさを評価し、戦後、大川周明が国家

主義者としてのイメージの強さゆえに、正当に評価されてこなかった事実を挙げている。

それによると、大川はイスラム教が西欧のキリスト教によって標準化された錯誤のイメージを塗り固められたことによって、本来そうではないにも拘らず、常に錯誤されたイメージで意識されることとなったことと、同じく西欧からイメージを塗り固められる受身の立場に有る日本人には共通点があるのではないかとしており、西欧に対して「下に置かれた者」同士としての意識からイスラムへの関心を強くしたのではないかと考え、であるからこそ、このイスラム教の正しい認識こそが、日本人としての自己認識へと繋がると考えていたと説明している。

では何故一般的日本人がこれほどまでにイスラム教に対しての知識と理解が無いのであろうか。

上記の学術的研究の動機はおおむね国家的理由などが主なもので、本人のイスラム教や

アラブ地域への興味関心から研究へと発展したとは言いがたい事からもわかる。

『イスラム教を知る事典』（東京堂出版、1999年）の渥美堅持は、その理由を、日本に沙漠的環境が無いことや、大陸と離れた島国であることなどの地理的環境に日本人の異文化に対する性格が特徴付けられたと見ている。

すなわち、民族的交流の激しい大陸的環境に対し、日本では「島国という地理的環境は異民族の侵略から身を守る天然の要塞を形成した反面、他民族・異文化との接触を希薄なものにした」（『イスラム教を知る事典』62頁）としている。

また、自然環境は沙漠などに比べると、人間の英知を持って乗り切ることが出来るほどの温暖なもので、それが為「日本は人間を中心として動く社会となった」（同上書、同上頁）とし、「創造主の律法が中心となっていてできる世界ではない」（同上書、同上頁）としている。



さらには、日本人が水田の土のように容易に姿を変えるのに比べ、沙漠の住人は砂粒のように、それぞれが一つの粒として「個」の存在であり、それ以上にもそれ以下にも姿を変えない、「部族のなかにあっても、自分の存在を明示し、常に集団化されない性格を持っている」（同上書、69頁）としているなど、日本人と大陸、特にアラブの人々との違いを示し、日本には一神教が根付きにくいとしている。

これらの要因が日本人のイスラムに対する関心の低さにつながっていると考えられる。

世界の三大宗教でありながらその接点の低さから、日本ではあまり関心が払われてこなかったイスラム教であるが、グローバル化の進む現代社会において、日本にとってこのイスラム教国やイスラム教徒の人々との関わりは無視できないものとなってきているのは確かであるが、これまでのような態度のままではイスラム教はおろか、世界の情勢に対して

も疎くなる危険性が有り、このような宗教に対する無関心さは改める必要があると同時に、異文化理解とその尊重が、逆に日本文化の再認識につながるものとなるはずである。

参考文献

東 隆 眞『日本の仏教とイスラーム』（春秋社、2002年）

鈴木規夫『日本人にとってイスラームとは何か』（筑摩書房、1998年）

渥美堅持『イスラム教を知る事典』（東京堂出版、1999年）